

早稲田大学言語学シンポジウム「多義の言語学と哲学」
2015年12月12日(土)

多義は (どこに) あるか？

酒井 智宏 (早稲田大学)
t-sakai@waseda.jp

1. 本シンポジウムの問い

- 多義性ネットワーク (多義構造、(多義の)意味構造) は実在するか？
- 実在する = 言語知識の一部をなす
- 言語知識 = 言語の使用を可能にする知識 (暗黙知)
- 「認知言語学は言語使用を可能にする(大部分暗黙の)知識とは何かを明らかにするという目標を生成文法と共有している。」(『明解言語学辞典』「認知言語学」)
- 多義性ネットワークの研究は (認知言語学も含めて) 現代言語学の研究としては意義をもたないのではないか？

疑惑の対象でないもの

- 多義現象 (polysemy) と称される現象が存在する。
= 一つの言語形式が複数の用法をもつ。
「リンゴを切る」「縁を切る」「社会を切る」
may ① 許可 ② 可能性 ③ 祈願
- 複数の用法のあいだに歴史的なつながり (派生関係) がある。(それを母語話者が自覚しているとはかぎらない。cf. クリプキの指示の因果説)
beads 「祈り」→「数珠」
eye 「目」→「針の穴」

疑惑の対象

- “Such polysemy chains are hypothesized to account for synchronic connections in the semantic knowledge of the user. [...] These chains exist statically to structure semantic information in the lexicon. We are not proposing them as parts of “semantic derivations”, nor are we proposing them as recapitulations of historical change [...]”
(Lakoff & C. Brugman 1986: 451、強調は引用者による。)

- 「[...]ネットワークにおける各々の節点 (node) が語の確立した意味を表し、節点同士はスキーマ関係 (schematicity) と拡張関係 (extension) という2つの基本的なタイプのカテゴリー化関係 (categorizing relationship)によって関連づけられる。」
(靱山・深田 2003: 167)
- 「関連づけられる」＝「研究者が関連づけられると思った」あるいは「研究者が関連づけを思いついた」ということにすぎないのでは？
- その証拠に・・・

- 「[多義構造の]専門家による内省分析は精度こそ高いものの、その研究者の主観に左右されやすく、それが研究者間の認識の不一致を引き起こすことにもなっていた。」(森山 2015a: 153)
- 意味の関連づけが実在するなら、分析の精度が高くなればなるほど一つの多義性ネットワークモデルに収束していくはず。
- 分析の精度が高いのにいつまでも認識が一致しないのは、意味の関連づけが実在しない(=「この語の多義構造は？」という問いにはそもそも正解がない)ということでは？
- 多義構造の研究は「幽霊の絵の精度を高める研究」と同じで、正解がない。

→ 言語学 (言語科学) の研究として意義をもたないのでは？

「(説明の便宜として使って) 教育に役立てる」くらいのことはできるかもしれないが・・・

実在性を確保するために・・・

- (前のスライドの引用箇所続き)
「その点心理的手法では不特定多数の対象者に対し実施するため、日本語母語話者の共通認識に近づくことができ、かつ内省分析が研究者の主観に陥っていないか、検証することもできる。」(森山 2015a: 153)
- 「共通認識に近づく」という言い方から、「多義構造が言語知識として実在する」、すなわち「多義構造には正解がある」と考えられていることがわかる。
- 心理実験をすれば多義構造の実在性が確保されるのか？
→ 山崎 (この後の発表) の問題提起

提題者 (山崎、酒井) にとっての実在性の基準

- 個体: 西村義樹、東京スカイツリー、etc. → 直接知覚可能。実在する。
- 自然種: ダイヤモンド、猫、etc. → 直接知覚可能。実在する。
- 人工物: 机、ドア、etc. → 直接知覚可能。実在する。
- オリオン座、さそり座、名水、害虫、etc.
→ 人間が勝手に思いついたものだが、直接知覚可能。実在する。
オリオン座が見える。もう冬だね。まあオリオン座は実在しないんだけどね。
- 物質: 酸素、水分子、素粒子、etc. → 操作・介入可能。あるいは少なくとも検出可能。実在する。
- ある種の理論的対象: 音素、「鳥」のプロトタイプ、etc.
→ 知覚も検出もできないが、人間の言語行動に影響を与える。認定根拠あり。実在する。
⇒ 提題者は懐疑論者/一般的(= 理論的対象全体にわたる)反実在論者ではない。このゆるやかな基準のもとでも...
- 幽霊、宇宙人、超能力、多義性ネットワーク → ???

認知言語学にケンカを売っている？

- 「「○○の研究者」として何年も過ごしていると、その領域固有の考え方に染まり、そこで慣例的に行われていることや共通理解とされていることを、当たり前のこととして受け入れるようになる。これはもちろん、悪いことではない。[...]とはいえ……。そのように定められた方法論が、「何ができるのか」を制約し、研究の可能性を制約してしまうこともまた事実である。[...]さらには、どのような研究手法も落とし穴を持っているために、研究者がそれに対して注意を怠ることも問題となる。これは、その領域に属する大多数の研究者が、正しいとコミットしている方法から生じるものなので、時としてみんなと同じ落とし穴にはまってしまうことにもなりかねない。」
(唐沢・戸田山 (編) 2012: ii-iii)

- 「現在研究中の具体的問題の背後にある個々の特定の仮説について容易にうまく話せる科学者は多いが、自らの専門分野の確立した基礎、その正当な問題や方法を特徴づけるにあたっては、素人よりもうまいとは限らない。」(Kuhn 1962: 邦訳53)
 - たとえこの種の思考が素人に劣るとしても、「特殊的事実論の問題には特殊科学の研究と発展によって解決をもたらすことができる。」(Hacking 1983: 邦訳76-77)
- 認知言語学の個別概念の实在性をめぐる問題には認知言語学の研究と発展によって解決をもたらすことができる。

認知言語学の問題を認知言語学の内側から検討しようという試み

ケンカの相手はむしろ・・・

- 「「では、プラトンはソフィストではなかったか？」
この問いから私の哲学が始まりました。プラトンさん、あなたに対して、そんな疑いの目を向ける者は、現代ではほとんどいません。[...]西洋哲学の巨人として権威が確立した後に、そんな疑問を抱くのは無礼です。[...]ですが、今、私はあなたに直接に語りかけます。
「プラトンさん、あなたは、ソフィストではありませんか？」
そして、あなたに代わって自分で答えられます。
「ソフィストかもしれない。そう疑わない者は、哲学者ではない。」
そう、あなたはこの答えにおいて、まさに哲学者です。私も自分に問います。
「私はソフィストではないか？」
そうして哲学者の道を歩みます。」 (納富 2015: 220-221)

ほんとうはケンカというより・・・

- 「ふと立ち止まり、「さて、自分たちは何をしているのか」を問い直すことは、現在自分が携わっている学問の限界や研究手法の問題点、そして、それを打ち破る可能性（不可能性である可能性もあるが・・・）を考える最良の機会だろう。きちんとした方法論、そして、暗黙裏に存在する「○○学とはこういうものですよ」という定めは、ありがたいけど窮屈だ。その枠は安易に越えてはいけないものでもあるのだろうが、「どの程度越えてもいいのか」を見定めながら、型を崩すことは、おそらく楽しいことである。」

(唐沢・戸田山 (編) 2012: iii)

キャスト

型を崩す (こわす) 係	山崎 香緒里 (Kaori Yamasaki)
いっしょになってこわす係 (→ 討論)	酒井 智宏 (Tomohiro Sakai)
型を守る (こわれたところを直す) & 守れない・直せないところは正直に言う係	長谷川 明香 (Sayaka Hasegawa)
「認知言語学とはこういうものですよ」という***正しい***定めを示す係	西村 義樹 (Yoshiki Nishimura)
「認知言語学とはこういうものですよ」という正しいとされた定め of 正しさを吟味する係	山口 征孝 (Masataka Yamaguchi)
ふと立ち止まり、「さて、自分たちは何をしているのか」を問い直す係	全員

参考文献

- Hacking, I. (1983) *Representing and intervening*, Cambridge University Press. 渡辺博 (訳)『表現と介入』ちくま学芸文庫、1986.
- 唐沢かおり・戸田山和久 (編) (2012) 『心と社会を科学する』東京大学出版会.
- Kuhn, T.S. (1962) *The structure of scientific revolutions*, University of Chicago Press. 中山茂 (訳) 『科学革命の構造』みすず書房、1971.
- Lakoff, G. & C. Brugman (1986) Argument forms in lexical semantics, *BLS* 12: 442-454.
- 靱山洋介・深田智 (2003) 「多義性」、松本曜 (編)『認知意味論』大修館書店: 135-186.
- 森山新 (2015a) 「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1: 138-155.
- 納富信留 (2015) 『プラトンとの哲学—対話篇をよむ—』岩波新書.
- 斎藤純男・田口喜久・西村義樹(編)(2015)『明解言語学辞典』三省堂.

- 本日の資料は、討論資料も含めて、下記のサイトにアップする予定です。

- 酒井智宏HP

<http://www.tomohirosakai.com/>